

年間第24主日

マタイ 18・21-35

高円寺教会 2017.9.17 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 うめざき たかいち 梅崎 隆一神父

今日の福音では、「七の七十倍まで赦しなさい」と言われます。それはすべてを赦しなさいという意味です。神様は人に要求されるだけでなく、神様ご自身がすべての人を赦します。しかし、今日の物語の中で赦されなかった人がいました。それは、百デナリオンの借金を赦さなかった人でした。神様はすべての者を赦しなさいと言いましたし、それをするように勧めているにもかかわらず、赦さなかった人がいるわけです。神様は全知全能の方だから何でもおできになる方なのに、何故この百デナリオンの借金を取り立てた人を赦さなかったのかということが、物語の中において緊張感をはらんだ部分となっています。

一万タラントン借金した人は、借金がなくなったとしても、彼の本来の役割は主人の家来です。だから、主人の思いを生きることが彼の本来の仕事です。しかし、彼は主人に忠実ではありませんでした。彼は七の七十倍赦されるという大きな喜びの中にいたにもかかわらず、しばらく歩いた後、借金している人を見つけ、赦された喜びはどこかに飛んで行ってしまい、神様に忠実に生きることをやめて、首を締めるという暴挙に出ました。「借金を返してもらうということは法秩序を守ることで正義を行うことだから、わたしのやっていることは非常に正しいのだ、主人が赦してくれたのは主人のことで、わたしがすることはわたしのすることだから勝手にさせてくれ」という思いもあったかもしれません。主人とこの家来の差というのは、結局、苦しんでいる相手に対して心を痛めるのか、それとも法律とか規則とか、そういうのを隠れ蓑にして、自分の攻撃的な快樂を満たすことの違いにあります。

キリスト者は、主人に一万タラントン赦された人と同じ人々です。洗礼を受けて、一万タラントンというお金では勘定できないくらいすべての罪を赦されて、借金の枷から放たれて自由の身となったのが、わたしたちです。でも、神様の赦しなんかよりも人の首を締めることのほうが大切だとしてしまうなら、神様を捨ててしまい、神様の赦しから遠ざかってしまいます。神様が赦してくださったにもかかわらず、「赦す必要などない」という生き方をすると、結局神様が赦したくても赦すことができない人間へと変わってしまいます。

神様は全知全能でなんでもできるのに、何故百デナリオンを取り立てる人を赦されなかったのか、それは神様が赦し自由を与えたとしても、人間が自由を

捨ててしまうことができるのです。自由になったのに自由を与えてくださった神様を捨てて、暴力を神様にすることによって、暴力の虜になってしまったとき、人は神と共に自由を捨ててしまいます。神様以外の何かを神様にしてしまうときに、人は必ずその奴隷となって自由を失い、人では払えない負債を作り出すこととなります。神様を捨てる人は、自由を否定し他の神々の奴隷となります。しかし神様は他の神々とは違い、人を奴隷にすることはなさいません。人に自由を与え、その自由を使って「愛すること」を望んでいます。神様から離れてしまった人に対しても、いつも自分のもとに帰ってくるようにと待っておられます。しかし、人間のほうが心を閉ざし、自分を閉じ込める牢屋に入って、自分の自由と人間性を否定してしまったときに、神様は手も足も出せません。神様は何でもできる方なのですが、人から自由を取り上げることはいたしません。人に自由がなければ、愛を生きることはできません。自由がなければ正しく生きててもロボットと同じように正確に動いただけであり、愛を実現することはできません。規則や法律、道徳などを偶像とし、正しく生きることだけを求める人もまた愛を生きることはできません。

この世界の中では神様にとってかわって、「正義」や「規則」などを偶像とし、弱いものをいじめたり、暴力を使うことを正当化する。けれども、何をやってもいいってわけではないはずです。正しいなら何をやってもいい、そういうことはありえないのです。人の首を締めること、暴力を使うことは、結局自分自身の美しい心を汚す暴力となり、欲望を満たすことで大切なものを失ってしまいます。

神様はいつでも、百デナリオンを取り立てて牢に入ってしまった人が我に返って自分のもとに帰ってくるのを待っています。神様は無制限に赦す方です。ですから神の赦しを受け入れる人間の決断にかかっています。暴力によって人は救いから遠ざかり、自から滅びてしまう道に向かいます。自分のいのちを愛するものはそれを失い、自分のいのちを失うものはそれを保つことになる。借金を取り立てることではなく、持っているものさえを捨てても永遠のいのちへの道を歩むことができますように、共に祈りましょう。